

部活道少年マンガ
を移項した試み

『BANBOO BLADE』
土浦理弘
五十嵐あぐり

+完結後の
感想

MANGA
REVIEW

ゴト千七

少年マンガを移項した試み

マンガのレビューをずうずうしくしようと思う。

題材は『BAMBOO BLADE』。通称『バンブレ』だ。まあ、他のマンガレビューを書く人と同じく、先行して書かれた雑誌やマンガ評論本などの紹介記事を参考にしてベースを作り、自分なりの意見を最後にテイストとして残しておく、というのがマンガレビューを書くときのセオリーなのだが、私も定石通り伊藤剛氏の『バンブレ』レビューを読んでから、レビューを書く。

伊藤剛著『マンガを読む。』(青土社)のレビューを参考にしてから、『バンブレ』を読んできた。

.....イカン！

伊藤剛がレビューに書いてあること、そのままのことが『バンブレ』を通して読むと描いてあった。伊藤剛のレビューは的確で適切で文句なし。レビューに書いてあることで間違いがないのだ。だから、私のレビューは読まなくていい。伊藤剛の『バンブレ』レビューを読め。以上レビュー終わり！

では、ちょっとアレなので、伊藤氏のレビューの補足説明をしたいと思う(これを人は「スリップストリーム」と言う)。

伊藤氏は『バンブレ』を「少年マンガ」だと評している。引用すると“(前略)だが少年マンガなのだ。それも『ジャンプ』や『マガジン』ではなく、『サンデー』の系譜に連なる。(後略)”と語っている。文字数制限がある雑誌のレビューなので、詳しく語れていないが、よく考えてみると、「なるほど。それは正しい」と思えてくる。

『バンブレ』はJKが部活で剣道をするマンガだ。サンデーで剣道マンガといえば、『六三四の剣』だ。そして、部活動で五人組と言えばサンデー作品では『帯をギュッとね!』だ。

これを中学数学レベルの展開・因数分解や移項する「たとえ」をすると、『バンブレ』になる。

『六三四の剣』の剣道を抽出し、『帯ギュ』の五人組に掛けてみる。

剣道×柔道部員五人組＝剣道部員五人組

この解は、納得してもらえらると思える(正確には「柔道」の部分に「剣道」を代入、かもしれない。まあいいや)。問題は次に、「移項」することだ。「剣道五人組」を展開すると、「男子高生・剣道五人組」となる(少年マンガなのだから)。

で、問題の「たとえ」である「移項」とは、「右辺から左辺に移項」するアレである。移項すると、プラスがマイナスに転じる、つまり、

0＝男子高生・剣道部員五人組 これを移項すると
女子高生・剣道五人組＝0

となる。

これは、あくまで、「たとえ」である。実際に数学教師の前で、「『♀=♀』の右辺を左辺に移項しまーす」とか言って、黒板に「♂♀=H」と書いたら、頭をグーでぶたれて、「このドケベ」と言われてしまうぞ。

(言われんでもわかると思うけど、これは数学を応用した遊びに過ぎない)

こうなってくると、マンガの単行本のおまけカットで自嘲気味に言ってる「『バンブレ』は男子が冷遇されるフェミニストマンガだ」というのは、あながち間違っていない。

要するに剣道部の男子部員二人(中田・栄花)は、サンデー作品の女子マネの役割をしているのだ。中田くんは『H2』の古賀はるかの立ち位置に似ている。比呂が中学時代で全国制覇するほどのエースと知ると「野球しないの?」と野球同好会に誘ったような気がする(後で調べたら記憶違いであった)。で、比呂は「ヒジ壊しちまったから」と断る(これも記憶違い)。タマちゃんも中田の誘いを断るという点で同じだ。でも、『バンブレ』と同じような状況で、比呂は「これで終わり」のつもりで、野球同好会に参加する。ダンくんこと栄花段十郎(あのキャラでこの名前はないだろう)も、部員が足りないから「俺の彼女誘ってみます」というのも、実例は出せないけど、サンデー作品の部活マンガで部員が足りない状況で女子マネが「じゃ、アタシのカレを呼んでくる(はあと)」というのと同じで、ありそうなシチュエーションだ。

つまり、女子マネージャーという役割も、「移項」しているということ。

女子マネ=男子高生・剣道部員五人組　これを両辺とも移項すると
女子高生・剣道部員五人組=男子部員

うーん。これは、なかなか説得力があるんじゃないのか。

で、伊藤剛氏の補足説明をした後は、私のしたい話。それは、「キリノはコジローのこと好きなんじゃないのか?」という疑いだ。

それは一巻の最初らへんに、出てくるセリフで匂ってくる。

先輩とケータイで話していたコジローに「今の彼女っすかー?」と、キリノは聞くのである。それも、先輩と話しているのをわかっていて、あえてコジローをからかっているのだ。

これはどういうことだろう?　いわゆる、気があるから、こういう行動をキリノはとっているのではないかと、いろいろと考えてしまう。

「質問です。どうして、あなたはキリノさんがコジロー先生を好きなのか、こだわるんですか」

いい質問だ。ありがとう。

答えは簡単だ。

「好きな娘の好きな人は誰なのか?　気になるじゃないか」

というわけで、疑惑のように、「キリノがコジローを好きなんじゃないか?」と思いつつ読んでいた。

第一巻の原作者のあとがき、「制作にあたって」によると、『バンブレ』はそもそも「当初の予定ではスパッと終わらせるつもりだった。3～5巻くらいの構想だった(以下略)」とある。

だから、「当初の予定」どおりだったら、町戸高との団体戦で室江高が勝って、本格江戸前寿司を毎日食う(賭けに勝ったから)コジローだけど、キリノが弁当で持ってくるお惣菜の方が「うめえや」みたいなオチがついて、「恋愛が始まっているのか？ いないのか？」のような曖昧な場面を見せて、終わるはずだったんじゃないの？

キリノ「コジロー先生、惣菜屋の娘をヨメにすると、毎日イイモン食えるよ」

コジロー「ああ、オマエが卒業したら、考えとく」

コジローもまんざら気がないワケでもないんじゃないと、テキトーなことを考えていた。『バンブレ』を九巻までしか読んでいなかった頃である。

んで、十巻目を読んで、

「ああ、よかった『バンブレ』を読んできて、よかった」

と、思うことがあった。

あとは、コジローが気づいてあげられるか、どうかだ。物語が進めば、それはわかるだろう。

たとえ、どう転んだとしても、私はキリノの味方☆

備考 2009.9月頃に掲示板にアップしたものをリライト。

やや力を抜いた、「ぬるい」文章を書いているのは、意図的。

『BAMBOO BLADE』が完結した現在、この話は「キリノとコジロー」に続く。

注意事項とラインナップ

『バンプレ』は完結したので、思い切ったレビューを書いてみる。

ラインナップは、

- ・ 隣の連載陣
- ・ キリノとコジロー
- ・ 『バッテリー』以後のスポーツマンガ
- ・ 面白さの絶対値は変わらない

これらは、言うなれば、ネタバレ話である。というよりも、一度『バンプレ』を最初から最後まで読まないと、わからないレビューになっている。

雑誌のマンガの紹介記事とは違い、あらすじを書いて、見所をひとつふたつつまんで語るという、レビューの方法とは同じではない。

文庫版の解説に、近いような印象を持つと思う。

読後、余韻を残しつつ、読まれるべきと、私は自負しているが、果たしてどうだろうか。

アニメレビュー

『魔法少女まどか☆マギカ』

ANIMATION
REVIEW

『魔法少女まどか☆マギカ』
シャフト

あの誤配されて溜まった、
山積みのデッドレターが、
焰をあげて魔力に変わる。
「少女と世界と趣向と魔法」より

ブックログのパー ¥10

Architecture Product System 広告

『バンブレ』はヤング誌連載なのに、ぜんぜんサービスカットがない。

『A-BOUT!』の広告ではないが、「パンチラなし、胸チラなし」である。たとえるなら、大沼さんのいない『GE〜グットエンディング〜』である。さすがに可愛い女の子は、出てくるが。

掲載紙『ヤングガンガン』の隣では『カノジョは官能小説家』があったり、パンツを「見せるか」「見せないか」を大議論する大変バカらしい『マンガ家さんとアシスタントさんと』（「見せない」ことを選んだら、後日「勘違いするな」と、読者からお便りが届く）があったり、『フロントミッション』のマンガでは「生き残るために春を売る」などのヤング誌らしいヤングな展開を見せる。

これらの連載陣のひとつなのだから、『バンブレ』でも、サービスカットがあるはずだ。部活をするとき、制服から剣道着に着替えなければならないのだから、ヤングな読者へのサービスがあるはずだ。

しかし、それが、ないのである。

いったい、どうして、このような読者に「心の乾き」を与える真似をするのだろう。

私は混乱し、投書して真意を確かめようかと、手に筆を持ったとき、よく考えたら理由がちゃんとあることに気づいた。

その理由は――

「作画担当のあぐりさんのお父さんがアシスタントだから」

というものである。

「そりゃあ、サービスカットを描けないわな」と、誰もが思う。お父さんにカタログ誌を見せて「ブラジャーの柄」を指差して、指定するわけにはいかない。「そんな皺ではダメだ。もっと食い込ませて」とは指示できない（主語を除いても何を食い込ませるのがわかる）。パズルのように、サービスカットのあるコマをお父さんに隠れてどこかに外注作画するなどの、ステルス行為をするわけにはいかない。

「ためしてガッテン」で志の輔に「ガッテンできますでしょうか？」と、言われるまでもなく、納得してしまう。

これは、後付的なことだけど、サービスカットが無いと少年マンガとしての純度が高くなる。というよりも、昔懐かしいマンガを読んでいるような、錯覚をしてしまう。80年代のラヴコメマンガ・ブーム以前の少年マンガは、スポーツマンガが主流で、サービスカットはほとんどなかった。

面白いことに、結果として、懐かしい少年マンガの味付けになっている。

偶然とはいえ、そこは面白いところである。

補足

『咲 阿知智編』の作画はあぐりさんだが、これは「お父さんをリストラして女の子の肢体を描こう」なのだろうか。

『バンプレ』は少年マンガらしく、恋愛を見せずに終わっている。

しかし、実は恋愛の経過を過ぎている。

コジローはしくじりをして、学校から放逐されることが、いうなれば「内定」している。そこで、剣道部の実績を作って、放逐から免れる算段を取っていた。

物語の終盤、コジローは学校を辞めなくてもいい状況となる。しかし、示しやケジメとして、学校を辞めることを決意している。

それを知っているのは、キリノだけだ。

キリノがそれを知っている理由はコジローをいつも見守っていたからだ。

そして、コジローもキリノには自分の心情が悟られてしまうとわかっている。

もう二人は、心が通じ合っている。でも、キリノが自分の本心を打ち明けることはない。少年マンガらしい、汚れない綺麗な恋愛だ。榊心のファンストーリー的恋愛(そもそもコレを恋愛と呼べるのか?)と、あまりにも落差がありすぎる。

この関係は、ボーイズ・ラブが好きなお姉さま方が、「スポーツマンガで男性同志の交流の中に見ている恋愛」そのものだ。本来はボーイズ・ラブ化して、男性同士の恋愛に置き換えられた関係を男女で行っている。

これは実はすごいことなのだ。

先鋭的な恋愛表現をするために、竹宮恵子さんや萩尾望都さんらが、男女では自分たちが表現したい恋愛を描けないから、手段として少年愛を選んだ。現在は手段が目的化しているが、かつてはそうであった。

『トーマの心臓』では、神学者を目指すことを選ぶ人物がいる。ある転校生の登場により、彼と交流していくなかで、自分が目指すべき目標を立てられるほどに成長する。同性とはいえ、彼と「恋愛」をしたから、結果として成長しているのだ。

コジローも同じ状況に置かれている。

コジローは恥ずかしいのだ。

剣道部顧問として、自分が教えるべきなのに、タマちゃんに教えられている。

それはたまらなく悔しいことで、たまらなく恥ずかしいことなのだ。だから、一回り大きくなるために、他校の剣道部の指導者となることを選ぶ。

今度はタマキに教えることができる指導者になるために。

まるで、それは好きな子に振り向いてもらうために、がんばる男の子だ。

前述したように、キリノはコジローの心情をよく知っている。だから、コジローの心の中に、タマちゃんがいることも知っている。

そして、タマちゃんは、「コジロー先生のようにになりたい」と、言っている。

キリノが入っていく、余地はないのである。

本当なら、三角関係になるはずだが、コジローとタマちゃんは『賢者の贈り物』的に、お互いにかけてえの無いものを送りあっている。つまり、相思相愛である。そこにキリノが割って入っ

ても、コジローが最終的にどちらを選ぶかは、コジローの心情を知ることができるキリノは、知っている。

そんなキリノとコジローの関係を表すエピソードには、こんなものがある。

タマちゃんが負けたとき、心配したコジローにキリノは「心配しなくても大丈夫」と言うシーンがある。

これはこう見立てられないか？

父親が失敗や粗相をした娘を心配しているときに、母親が旦那に「あなたの娘を信じなさいな」と、言っているシチュエーションに似ている。旦那を信用しているから、奥さんは「心配無用」と言える。

秘密というわけじゃないが、父親と母親の役割を担っている人間は恋愛しない。正確には、恋愛をしているところを表出させない。家庭生活の邪魔になるから。つまり、部活動の邪魔になる。

この見立てでは、部活に関わる人間がタマちゃんを中心に、擬似家族的共同体になりえていることが、伺える。

そして、ここでも、コジローの心情が擬似家族の役割から裏付けられる。

コジローは娘に失望されない立派な父親になりたいように、タマキが目指すべき立派な指導者になりたいのだ。

この指導者も『トーマの心臓』の神学者も、その職業に従事することに意義があるわけではない。なるべき人間としての象徴としてあるのだ。成長した証としての目指すべき目標なのである。

キリノは目指すべき目標を立てたコジローを、利己的であったことを恥じて、利他的になれる人間になろうとする、自分の想い人を引き止めることができない。

神学者を目指すと決めた人物を、転校生が引き止めることができないように。

それは、たまらなくせつないことだ。

『バッテリー』以後のスポーツマンガ

『バンプレ』では、マンガ中テレビ番組である「熱血バニッシュ学園」の収録で行われる非公式戦が物語のクライマックス・極相になっている。最後の団体戦によるトーナメントは、室江高校の女子剣道部員、キリノ、サヤ、ミヤミヤ、サトリ、彼女たちに花を持たせるために用意されている。試合なのだけど、構成上はエピローグだ。だから、非公式戦が物語の頂点になっている。

これは、児童文学『バッテリー』以後の決着のつけ方だ。

文芸評論家の齊藤美奈子が『バッテリー』の書評で書いているように、「公式戦で決着をつけるのではなく、非公式戦で決着をつけている」というのが、『バッテリー』でのクライマックスなのだが、スポーツ物でやりつくされた「全国大会決勝（あるいはそれに準ずる試合）での決着」というパターン化されていた予定調和に一石を投じた。

これは、ある種のエポックだったのだと、今では言えるのではないか。

『バンプレ』の原作者である土浦さんは、直接的に影響を受けているかどうかはわからないが、投げられた石が作った波紋を受けている。波は遮蔽物で避けたとしても、回折して遮蔽物の裏まで、弱くても波は届く。それを「時代の波」と言ってしまえば、陳腐に聞こえるかもしれないが、どうしても、その影響を受けてしまう。

できれば、相対評価はしないに越したことはないが、あえてすれば、『新約巨人の星 花形』は全国大会である甲子園で物語が失速している。本来盛り上がるはずが、あまりにも地区予選大会で対戦相手の物語を掘り下げすぎたため、星や左門がワン・オブ・ゼム（たくさんの中のひとつ）になってしまっている。野球が二番目に好きなアイドル好きや、最多奪三振の洩タレエースと変わらない。

『大正野球娘。』のレビューを書いたときに、少年たちのジュヴナイル・ドラマはたくさんの過去作品があるから、「見る前から飽きている」と、指摘したことがある。『花形』では、「見る前から飽きている」原作の通りになぞっているから、ハッキリ言うと、星飛雄馬対花形満の最終対決は、面白くなかった。検証不足で感想にすぎないことだけど、球速表示がマンガの面白さを損なっている気がする。

現代マンガのリアリティで、原作の星対花形の大時代的な対決は、土台無理があったのかもしれない。原作が描かれた時代には通用した荒唐無稽、たとえば甲子園は“バックスクリーンの側に日が落ちる”誤った球場設計などが、通用しない時代だからこそ、球速表示をしなければならなくなる。すると『クロスゲーム』でも同じように、現実味を帯びない印象を受ける。強いて言うなら、高校球児が160キロ以上の超豪速球を投げるのは、マンガ的リアリズムとしては有りだけど、高校野球的リアリズムとの相性が悪いのだ。

高校野球的リアリズムとして、受け手である読者が求めているリアリティは今現在『もしドラ』の方にある。さらに言えば、『もしドラ』で引用される『マネジメント』によって『花形』と『クロスゲーム』の問題点が洗い出される。つまり、「過去のものがまるで陳腐で取るに足らないものになってしまうこと」がイノベーションだとするドラッカーの言うように、「スポーツ

マンガの過去の方法論が通用しなくなったこと」が起因している、と、思える。

それは、次の章で掘り下げよう。

補足

『バンブレ』の話をするはずが、野球マンガ論になってしまったので、そうそうに終わらせた。

ここから、本当の補足で、スポーツマンガをさらに区分した野球マンガでは、90年代後半に『バッテリー』が現れて刷新されて、ゼロ年代末に『もしドラ』が出てきて、これからの向こう10年間で変わっていくだろう。と、予測できるが、間違っていたら、「そのときはゴトチヒを笑ってくれ」と言うしかない。

フォローしておく、過去の名作は色あせることは無い。ただ、名作と同じ方法論を取っても、名作と同じ評価は得られるわけではない。

面白さの絶対値は変わらない

最終巻の巻末で土浦さんは編集者に「『ガンガン』ではスポーツマンガは受けない」と言われた、と明かしている。これは正確ではないと思える。今までの方法論が通用しないのではないだろうか？ もちろん、梶原一騎的なビルドゥングスロマンは古臭く、あだち充的な恋愛を注入するのも使い回され、身体能力の高いヤンキーがスポーツをしてヒーローになる話も目新しさはなくなってきている。

読者は新しいスポーツマンガが読みたいのだ。それは雑誌『ガンガン』の読者であっても同じはずである。

話は迂回になるが、剣道の指導者として林忠明先生が登場するのだが、彼はコジローに名セリフを残している。

林先生は、「こども達は変わっていくが、方針は変えない」と、前置きしてから、「だって」をはさみ、

「剣道は 変わりませんから」

と、コジローに言う。

『バンブレ』全体を見通しても、珠玉の名セリフだ。

この言葉を聞いた、コジローは「剣道は変わらない」と言い直す。

「剣道は変わらない」の「剣道」の部分に「マンガ」を代入すると、見えてくるものがある。それは「マンガは変わらない」なのであるのだが、マンガというのは、刻一刻と変わっていくものであるから、構文としては成立するが、実感として首肯しがたく納得はできない。

では、「こども達は変わっていく」の「こども達」は、「マンガは変わらない」にもものだとしたら、いったい何に置き換えられるか？ それは読者である。

読者から逆算して、コジローを土塚さんに見立てると、林先生はマンガ家である土塚さんが信頼のおく編集者と見立てることができる。さきほどの「『ガンガン』ではスポーツマンガは受けない」と言った編集者にあたるであろう。

だとしたら「スポーツマンガは変わらない」という意味になっても、おかしくはない。言うなれば「スポーツマンガは変わらないけれど、読者は変わっていくから、受けなくなる」となり、弱音とも取れる言葉になってしまう。しかし、前述した通りマンガは変わっていくのだから、ジャンルマンガのひとつであるスポーツマンガも変わらざるを得ないだろう。

だが、変わらないものがあるはずである。

それを考えると、「部活系少年マンガを移項した試み」を思い出してほしい。

新しい試みとして、部活系少年マンガの男女を「移項」したとしても、両辺の絶対値は変わらない。その変わらない絶対値はなんなのかと、問われたら、それは「スポーツマンガの面白さ」だ。

読者は変わる。だが、スポーツマンガの面白さは変わらない。

この矜持、あるいは信じているものがあるからこそ、林先生のセリフに表わされているのである。

さらには「方針は変えない」は、詭弁になってしまう恐れを省みずに言えば、文脈を踏まえて、類型をなぞることではないだろうか。反対に考えてみると、文脈を踏み外して、類型をなぞらないと、それはスポーツマンガというジャンルではなくなってしまう。

奇しくも、『バンブレ』はスポーツマンガの文脈として変わらないものいくつかある。

実は『バンブレ』はコジローのビルドゥングスロマンとして読めるし、亡くなられた母親椿さんの剣道への思いを継いでいる点でタマちゃんは、「移項」された星飛雄馬や六三四である（椿さんは九州の鬼ツバキだと）。ヤンキー少女のミヤミヤはダンくんのために剣道をはじめていることから、上杉達也や桜木花道のやはり「移項」である。文脈を踏まえて類型をなぞっているのだ。

強いて言えば、サービスカットは、昔のスポーツマンガには無かったものだ。そして、描かれていた恋愛も、恋愛とはいえない男女の淡い関係だったのだが、それをキリノとコジローは見せている。

今までの類型的キャラクター配置も、男女を「移項」することによって、類型をなぞりながらも新調している。

つまり、こういうことが言えるだろう。

「読者は変わっていくが、スポーツマンガの文脈や類型は変えない。なぜなら、スポーツマンガの面白さは変わりませんから」

これらを踏まえると、やはり『バッテリー』は新しかったのだと、評価せざるをえない。少年野球のリアリズムと、フィクションとしてのケレン味が絶妙に配分されている。そして、タイトルにあるバッテリーの関係。このバッテリーの関係を抽出して、クローズアップしたのが、『おおきく振りかぶって』と考えていい。『バッテリー』のピッチャーの性格付けを反転させると、『おお振り』のダメピー三橋になる。それに合わせて、強気なキャッチャー安部となる。

文脈を踏まえ、類型をなぞりながら、新しくなっていく（『もしドラ』でいえばイノベーション）。この三つを押さえられる限り、「スポーツマンガの面白さは変わらない」のではないだろうか。

《終》

備考

セリフの構文を解体して、見立てたり、置き換えしたりするのは、危険なことだ。注意深くやらないと、落とし穴に落ちる。そのために、相当時間がかかった。次はやれない。

一応、これでアップしたが、時間が経ったらリライトしたい。

マンガレビュー 『BAMBOO BLADE』

<http://p.booklog.jp/book/21277>

著者：ゴトチヒ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gotochihi1980/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/21277>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/21277>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

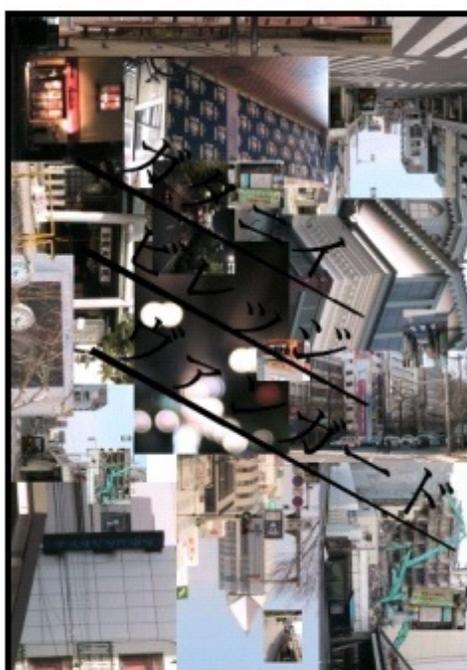
運営会社：株式会社paperboy&co.

GVV

ジャズ喫茶小説
という分野がある。
これはそのひとつ。

Architecture
Product
System

ブックログのpapier
¥50



広告
ガタニイ
ビレッジ
ヴァンガード

五島千尋

